

アイドルお忍びバー - 時空 -
ドラマスペシヤル

2016年12月7日

Version 1.01

作 :: Z I K U

所属 :: MediaCreation Infinect

「アイドルお忍びバー - 時空- ドラマスペシャル」・登場人物表

マスターZIKU（マスター）

バーのマスター 鍛冶屋と恋人関係

鍛冶屋佳奈枝

マスターと恋人関係

中尾聖

バーの常連客

鍛冶屋かなえ

鍛冶屋佳奈枝と同姓同名の一見客

BGM::いつものバー時空のBGM (PX1 no)

マスター(M) どうも！バー時空のマスター、ZIKUです。

いつもご来店いただき誠にありがとうございます。

現在、朝の6:30。後片付けも終わり、丁度今店を閉めたところです。

いつものようにシャッターを閉めると、そこはいつもと同じ気持ちの良い朝の風景。

そんないつもと同じ今日。

僕にとって、人生最悪の日がすぐそこまで迫っていました。

SE::都会の朝の雑踏 (PX2 no)

佳奈枝

「あー、すっかり遅くなっちゃった…。レコーディングって大変なのね。スタジオの中だと外の様子わかんないもんなあ…すっかり朝じゃない。

マスターもう帰っちゃったかなあ

…

あ、マスターだ。丁度いま、店閉めたところだったのね。

よかったあ…

やっぱり、一仕事終えて、マスターの顔見れるのって見れないのとは、次の日のモチベーションが違うのよ。うんうん…

ウヒヒ。後ろからそっと近づいて驚かしちゃおうと」

SE::都会の朝の雑踏 STOP (PX2 停止)

佳奈枝(M)

その時私は、表参道の方から、この細い路地ではありえないスピードで走ってくる自動車に気が付きました。

ウン…まっすぐマスターの方に向かってるじゃない？

佳奈枝

「マスター！！！！」

マスター

「おうわ！ 佳奈枝ちゃん？びっくりしたあ、今丁度…」

佳奈枝

「マスター！ 車！ 逃げて！ 逃げてえ！」

マスター 「え？」

SE:車クラッシュ (PX2 no)

マスター(M) この時記憶しているのは、飛び込んでくる自動車の運転手が、うなだれるようにうつむいていた事と、見たことない必死な形相の佳奈枝だった。

佳奈枝、あんな顔するんだな。

SE:救急車 (PX2 no)

2. 病院 マスター気が付く

マスター(M) どれくらい眠っていたのだろうか？ 僕は無事だった。

不思議と骨折などもなく、奇跡的に軽傷で済んでいた。

佳奈枝 「あ、気が付いた！ よかったあ」

マスター 「う、佳奈枝ちゃん？ 僕は？ ここは… 病院か？」

佳奈枝 「そうだよ。2日間、眠りっぱなし。まあ、怪我は大した事ないみたいだから、大丈夫だとは思ってたけど、目が覚めないよ、やっぱり心配しちゃうよ。」

マスター 「そうだ、自動車にツッコまれたんだよな。僕、よくこんな軽傷で済んだな。」

佳奈枝少し笑って

佳奈枝 「それね、あたしがトーンってマスターの事突き飛ばしたのよ。もう反射的に。結構ぶっとなでね。それからずっと意識が無いから『えー！ 私が殺しちゃった？』とか思っちゃって焦ったよーw」

マスター 「はは、佳奈枝ちゃんは僕の命の恩人だな。」

佳奈枝 「そうよー 感謝してよね。」

マスター 「あ、そうだ、お店、二日間休みにしちゃったな。」

佳奈枝

「もう、そんな事心配しないでいいの！ 聖ちゃんが気を利かして、入口に『入院中につきしばらくお休みします』的な張り紙してくれてたよ。」

マスター

「聖ちゃんが？ それはお手数かけちゃったなあ。」

佳奈枝

「お見舞いも来てくれたんだよ。もしかしたら、もうそろそろ来るころかも…（少し間を開ける）マスターも元気そうだし、あたし、そろそろ帰るね。」

マスター

「えー、もう帰っちゃうのか…」

佳奈枝

「あたしもね、ずっと暇なわけじゃないのよ。またくるね」

マスター

「うん、ほんと、ありがとう。」

佳奈枝

「はい、じゃーねー」

SE：扉占める音

(PX2 no)

SE：ノック

(PX2 no)

マスター

「どうぞー」

聖

「あ、気が付いてる！ よかったー」

マスター

「ああ、聖ちゃん！ 心配かけてごめんね。」

聖

「本当ですよ！ すっごい心配したんですよ。全然目を覚まさないから。（少し間をあけて）でも結構、寝言とか言ってたから、大丈夫かな〜とも思っていましたけどね。」

マスター

「えー、本当に？ 僕なんて寝言言ってた？」

聖

「まりあちゃん、まりあちゃん…って言っていました」

マスター

「嘘だよお！」

聖

「（笑いながら）本当ですって」

マスター（M）

僕はこの時、ほんのわずかな違和感を感じていた。

この違和感が一体何なのか？ 聖ちゃんが帰った後も、わからずにいた。

マスター (M) あれから3日入院して、まあ、元々たいした怪我なんかしていなかったんだけど、僕の体調はすっかり戻っていた。

佳奈枝 「明日、退院だね。あたしが居ない間、退屈だったんじゃない？」

マスター 「本当だよ。入院なんてするもんじゃないね。スマホのゲームめっちゃ課金しちゃったよ。」

佳奈枝 「課金厨だね！」

マスター 「いいだろ？ すっげー暇なんだから。早く店に出たい」

SE : ノック (Px2 no)

マスター 「どうぞー」

聖 「マスター！ いやいよ退院ですね。」

マスター 「ああ、聖ちゃん。お世話になったね。本当にありがとう。」

聖 「マスター、今だれかとしやべってました？ 入口に立った時に声がしたんで：電話中でした？」

マスター 「いやいや、佳奈枝ちゃんと喋ってただけだよ。大丈夫。大丈夫。」

聖 「え？ 佳奈枝さんですか？」

マスター 「うん、課金厨だとか言われてさあ： あ、そうだ。聖ちゃん、店の入り口に張り紙してくれたんだってね。お礼言っただけだった。ほんと助かったよ。なかなかできるものじゃないよね。気が利く娘だよ君は。」

聖 「えっと、それ、誰に聞いたんですか？」

マスター 「うん？ ココで目が覚めた時に佳奈枝ちゃんが教えてくれたんだ。本当にありがとう。」

聖 「(前のマスターのセリフにかぶせ気味で) マスター、ちよっとまって！ (少し間をおいて) あのね マスター。マスターの入院が、ショックで長引いたらいけないし、マスターから聞かれる事もなかったので、あえて今まで黙ってたけどね…」

マスター 「聖ちゃん？ どうしたの怖い顔して」

聖 「マスターは佳奈枝さんに、突き飛ばされて助かったでしょ？ 自動車、佳奈枝さんに直撃したんです。」

マスター 「聖ちゃん…、何言ってるんだよ。冗談きついよ。」

佳奈枝はそこでピンピンしてるじゃん？ ドッキリにしちゃ不謹慎すぎるでしょ。」

聖 「佳奈枝さんは、もう、居ないんです」

佳奈枝 「マスター。あたし帰るね。」

マスター 「待ってよ、佳奈枝ちゃん。ちよっと待ってよ。いるじゃん！ そこにさ、聖ちゃんのすぐ横にさ…」

聖 「即死だったんですよ！

佳奈枝さん、即死だったんです！

佳奈枝さんは、もう居ないんです。」

マスター (M) 違和感の正体はコレだった。

佳奈枝と聖ちゃんが、ニアミスしようが、一緒の部屋にしようが、この二人が語り合うことはなかった。特に聖ちゃんは、佳奈枝の存在に、気が付いてさえないなかったのだ。

僕の為に佳奈枝が死んだ。嘘だ… だって、さっきも他愛もない話を一緒にしてたじゃないか？

SE: 空港 (PX2 no)

マスター(M) 次の日、僕は空港にいた。

以前、佳奈枝はハリウッドで夢をつかむ為に、ここから飛び立ったのだ。

あの時は、絶対見送り間にあわないうって思っていたのに、実際は飛行機の時間を間違っつて、結局見送ることができたんだよな。

佳奈枝がおつちよこちよいで助かったな。

佳奈枝

「マスター？ もう、あなたのセンチメンタリズムで、そう都合よく、私が現れると思ったら、大間違いですかね！」

マスター

「でも、きてくれたじゃん。」

佳奈枝

「へへ、来ると思ってたもん。」

マスター(M)

そこには、いつも通りの、ひとなつっこい笑顔の佳奈枝がいた。

マスター

「佳奈枝ちゃんが、ハリウッドに旅立った日の事、思い出すね。」

佳奈枝

「わがままなんか全然言わないマスターが『いっしょにいてくれ』って止めてくれたんだよね。」

マスター

「手旗信号だったけどね。」

佳奈枝

「そうそう！ 手旗信号！ あれ、私が理解できなかったらどうするつもりだったの？」

マスター

「いやあ、たしかバーで『手旗信号ワカル！』って自慢げに言ってたような気がしてたからさ。」

佳奈枝

「ほえー、よく覚えてるね！」

マスター

「もし勘違いだったら、それはそれで応援団みたいでいいかな？とか… まあとにかく必死だったのよ。」

佳奈枝 「あはは、ウケる！」

マスター 「フフ、ウケるよな。」

マスター (M) とにかく明るい話題で繋ぎたかった。会話が終わると、もう2度と佳奈枝には会えない気がしていた。

佳奈枝 「事故大変だったよね。」

マスター 「いいよ、その話は。」

佳奈枝 「ごめんね。」

マスター 「なんだよ、なんであやまるのさ。」

佳奈枝 「ごめんなさい。」

マスター 「もう、よそよよ、この話は…。」

佳奈枝 「あたしは、死んじゃったよ。」

マスター 「(少しためて) そっか…」

佳奈枝 「うん…」

マスター (M) 佳奈枝が死んだのなら、僕はこの空港で誰としゃべっているんだろう？ 他の人には、僕が独り言をブツブツ言っている奴に見えているんだろうか？

そんな事、正直、どうだっていい。とうとう、会話が途絶えてしまった。

佳奈枝 「よし！ 展望デッキへ行こう！」

マスター 「え？」

佳奈枝 「ほら、いくよ!!」

BGM : oh! Yeah! / 小田和正 (PX1 no)

BGM ボリュームダウン

マスター (M) 展望デッキは、不思議と人気(ひとけ)がなかった。

佳奈枝は、広い展望デッキを走ってみたり、くるくる回ってみたり、大きな飛行機に驚いたりしていた。

佳奈枝 「マスター。(ためて) お別れの時間だよ。」

マスター 「ええ？ 急だな…」

佳奈枝 「最後こうやってお別れ言えるだけでも感謝しなくちゃだよ！」

マスター 「フフ、そうだな。」

佳奈枝 「うーん、でもこのままじゃ、なんとなく踏ん切りつかないなあ…（少し間をおいて）恋人との時間が名残惜しいとき、いいお別れの方法知らない？」

マスター 「ああ… 東京ラブストーリーで、「かんち」と「赤名リカ」がその日なかなかお別れできないって事で、いつせいで背を向けるってのがあったな。」

佳奈枝 「知ってるよー 世代じゃないけど。」

マスター 「年寄扱いしたなあー」

佳奈枝 「あはは！ 昭和！」

マスター 「うるさいよ！」

佳奈枝 「それじゃ、やろう！ 私はこっちの出口へ、マスターは向こうの出口に向かうんだよ！」

マスター 「わかった！」

佳奈枝 「んじや、ずるっこ無しね！」

マスター 「なんだよ、ずるっこってw」

佳奈枝 「行くよ！」

マスター&佳奈枝 「せーのっ」

マスター (M) 僕には希望があった、ドラマでは、この後「赤名リカ」は、実は背を向けておらず、そのまま「かんち」の背中を見ていたのだ。

マスター 「この後さ、ドラマだと、リカは振り向いてなかったんだよね。」

佳奈枝 「そうそう。織田裕二だけが、ニコニコしながら歩（あゆ）みを、すすめるの。」

マスター 「そうなんだよ。あの表情がいいんだよね。」

佳奈枝 「マスター（ためて）大好きだよ。」

マスター 「おっと、佳奈枝さん、その台詞はまだ早いよ。まずは織田裕二がしばらく進んだところで、ちらっと振り返るんだ」

佳奈枝 「あたし、マスターに出会えて、本当に幸せだった」

マスター 「まだだよ！ まだまだ！ もう少ししたら僕が振り返るから、そうしたら君はそこに立っていて…」

佳奈枝 「さようなら、マスター 本当に、本当に大好き。」

マスター 「佳奈枝ちゃん、だからまだ、早いんだって！」

マスター（M） 思わず振り返ると、つい今まで、すぐそこで喋っていたはずの佳奈枝は消えていて、広い展望デッキに、僕は独りだった。

マスター 「ほら、早いんだって。ここでさ、僕は、佳奈枝ちゃんと目が合っただけなんだよ。『ずっちなあ』って。その後だろ？ 『大好き！』はその後だろうか？

BGM ボリュームアップ

ー 休憩 ー

BGM::いつものバー時空のBGM(PX1 no)

SE::カクテルを振る音(PX2 no)

マスター 「はい、お待ちせしました。」

聖 「わぁーい、いただきまーす。あ、チョコ味！」

マスター 「うん、これは佳奈枝ちゃんが、自分だけの為に仕入れさせたチョコレートトリキユールを使ったお酒だよ。」

聖 「そっか、佳奈枝さんの… マスター。もう大丈夫？」

マスター 「ああ、そりゃ、たまにはさびしく思う事もあるけど、それくらい思っつてやらないと佳奈枝ちゃん、かわいそうだからね。」

聖 「さびしい時は、あたしが慰めてあげちゃうよー」

マスター 「あはは、間に合ってます。」

聖 「うわー、なにそれ！」

マスター 「あはは、冗談だよ。」

聖 「え？ 冗談って事は、慰められた言っつて事？」

マスター 「そういう事でも、ありません！」

聖 「あはは(しばらく間をおいて)

そうだ、マスター。 マスターはさ、佳奈枝さんが亡くなった後でも、しばらく佳奈枝さんの姿をみてたんだよね？」

マスター 「うん。あれはなんだったんだろうな。今思うと不思議な感じだよ。」

聖 「うん、あたしね、正直言うと、マスター頭打つて、なんだか幻覚とか見ちゃってるんだと思っつたの。」

マスター 「だよねw」

聖 「でもね、昨日お部屋のかたづけをしてたら、こんなもの
見つけちゃってね。」

マスター 「手紙？ 封はしてないね。」

聖 「佳奈枝さんからのお手紙なの。」

マスター 「佳奈枝ちゃんから？」

聖 「これを読んで、マスターが本当に佳奈枝さんと会って
たんだなってわかったよ。」

マスター 「そうなの？」

聖 「うん、読んであげるね。」

聖 「まりたんへ（ここから佳奈枝さん読み 序盤かぶり）
急にいなくなっちゃってごめんね。
セブンカラーズの事、よろしくね。」

あと、マスターがさびしがってると思うから、バーにはチ
ヨクチョコ顔出してあげてください。
でも、マスターに変な事しちゃ駄目よ！
見えないかもしれないけど、見張ってるんだからっ
バイバイ 鍛冶屋佳奈枝」

マスター 「これって…」

聖 「そうなの。どう考えても、亡くなった後に、佳奈枝さん
が書き残してくれたものだと思うんだ。だから、マスター
の言ってた事、本当なんだろうなって。」

マスター 「聖ちゃん、見せてくれてありがとう。」

聖 「いえいえー（ちよいと間をおいて）それじゃ、あんまり
マスターといちゃいちゃしていると佳奈枝さんに怒られちゃ
うから、ここらで帰りまーす。」

マスター 「そっか、ありがとうね。聖ちゃん。」

聖 「はいはい、それじゃまた来まーす。」

マスター 「いってらっしゃいませ。」

SE: ドラブル

(PX2 no)

マスター 「さてと、もう今日はこれで閉めちゃおうかな。」

SE::ドアベル (PX2 no)

かなえ 「すいませーん。まだよろしいですか？」

マスター 「あ、え？ 佳奈枝 ちゃん？」

BGM::ラブストーリーは突然に／小田和正 (PX1 no)

BGMボリウムダウン

かなえ 「え？ あ、はい。あれ？」

「どこかでお会いしましたっけ？」

マスター (M) 閉店間際、一人で入店してきた女性は、佳奈枝と瓜二つな

女性だった。しかし、その余所余所しい態度は、あの佳奈枝とは別人だという事を認識するに十分だった。

マスター 「あ、いや、失礼しました。知り合いに似ていたもので、思わず… さあ、どうぞ何かおつくりいたしますよ。」

かなえ 「よかった、ありがとうございます。遅くまで大変ですね。」

マスター 「いえいえ、今日もこの時間まで開けていたからこそ、貴方が来てくださいました。」

かなえ 「うわー、モテそうー」

マスター 「ええ？ なんなんですか！」

かなえ 「あはは、冗談ですよ。」

マスター 「何になさいますか？」

かなえ 「ちよっと珍しいから、無いかも、なんですけど… チョコレートのリキュールってあります？ ゴディバの…」

マスター 「え？、あ、ああございますよ！」

かなえ 「わあーすごい！ あんまりお店においてないですよね？これ。」

マスター

「はい。知り合いに、このリキュールが好きな者がおりまして、正直、その者の為に仕入れたようなものですね。先ほど、似ている知り合いと…その人なんですよ。」

かなえ

「へー。そういえば、その人と間違っって、あたしを『かなえ』って呼びましたよね？ あたしも、かなえって名前なんです。鍛冶屋かなえ。」

マスター (M)

こんな偶然があるのだろうか？ 顔もそっくり、お酒の趣味も同じ、そして名前まで同じときた。

あ、ただし、名前は漢字ではなくひらがなという事だった。まあ、それでも、「数日間幽霊としゃべっていた」という事よりは常識的な事なのかもな。

なんて事を考えていると、思わず吹き出してしまった。

かなえ

「えー？ なんですか？ 急に笑い出して」

マスター

「いやいや、ごめんなさい。あんまりにも、その知り合いとの共通点が多いもので…驚きました！」

かなえ

「でも、そんなに似ているんですね。不思議！」

マスター

「そうですね？ 不思議な事があるもんですね。」

かなえ

「あつてみたいなく、そのもう一人の佳奈枝さんと。」

マスター

「かなえさん？ 今日はまだお時間よろしいですか？ その佳奈枝さんと僕の不思議なお話し、お聞きくださいませんか？」

BGM ボリュームアップ

(終わり)